なかった。

4. 臨床青年心理学への接近。52年度に，共同研究で打ちだした「序説」にひきつづいて，臨床場面で出会った青年のケースにみられる発達問題を究明することに努めることができた。特に，学部全体をあげての「教育'60年代研究」の分担課題として，「現代青年の内面的構造」も，主題に組み込んで取り組むことができた。具体的な成果としては，「登校拒否・家庭内暴力・働くということ」（研究紀要25巻，53.12），「臨床青年心理学研究(Ⅲ)―男子症例に関する考察」(研究紀要26巻，54.12)，「思春期登校拒否と働くということとの関連について」（東海相談学会，55.3）がある。また依頼によって「青年とノイローゼ」(藤永保他編『青年心理学』テキストブック心理学5. 有斐閣. 53.10）をまとめることができた。

5. グループ・アプローチ，エンカウンター・グループの実践研究。近年，筆者のなかでかなり重きをおいてきている，集中的グループ体験である。まず全国学生相談教官の有志の参加によるエンカウンター・グループでは，愛媛大学福井康之・砂田良一両氏の世話によるものに参加し（53.7），瀬戸内の中島の海浜の臨海実験所での合宿で自らを開示しながら，自己発見，自己啓発をする機会に恵まれた。またファシリテーターとして参加したものに名大学生相談室主催のもの，民間団体主催のものなど，数カ所，数回あった。これらのグループでの体験については，「昭和53年度厚生補導特別企画・第2回自己再発見のための合宿セミナー」(54.3)，「昭和54年度厚生補導特別企画・第3回自己再発見のための合宿セミナー」(53.3）として，いずれも名大学生相談室発行のものに所収されている。また「現代社会と精神健康 ― 集中的グループ経験の実践を通して」(『保健の科学』1980，22巻，55.1）の一文もまとめる機会を得た。今後とも，かかるグループ体験は，ますます続けていくつもりである。

また学生相談研究会議が正月明けの京都で54.1，名古屋（定光寺，55.1）で開かれたが，特に名古屋会議は企画・運営の末端にひとりとして名を連ね，「共通一次元年」をめぐるシンポジウム，症例検討会に参加した。このテーマは，次年度の九州大学に引き継がれて，討議が深められることになっている。ただ各大学の報告にもあるように共通一次試験が導入され，大学受験のチャンスが一回となり，個性の乏しいこじんまりとした学生が増加していることが多くなっているとすれば憂うべき事態であると考えられる。今後，見守っていきたいと思っている。

6. その他の活動などについて

「適応の心理」(藤永保他編『教育心理学』テキストブック心理学1，有斐閣. 53.4）

「甘え」他31項目.（大山正他編『心理学小辞典』有斐閣. 53.5）

「臨床相談室・家を出るということ ― その肯定的側面と否定的側面 ― 」(『青年心理』，2巻11号，53.10）

「同時面接〈平行面接〉」他6項目.（内山喜久雄監修；高野清純・稲村博編『情緒障害事典』岩崎学術出版社. 53.4）

「現場研究の進め方 ― 事例研究」(『教育心理』第27巻1号. 53.12）

「子どもの悩みとその克服」(国際児童年記念シンポジウム『子どもと環境』その6『子どもの悩み』. 中日新聞社. 54.8）

《以 下 略》

（55.8.5 記）

研究経過報告

村 上 隆

今年は余り実り多い年とは言えなかった。主たる仕事は従来通り，3相データの因子分析法と一次元の尺度構成であった。

前者については，昨年の紀要論文以上のさしたる進展はなかった。多少シュミレーションを追加する等して，日本行動計量学会第8回大会において発表した。このテーマについては，幸い今年度の科学研究費が交布されることにもなったので，今年の残りは，主としてこれに時間を割くことにしたいと考えている。基本的には，この3相因子分析モデルのもつ大きなflexibilityを生かしつつ，これにさまざまなconstraintsを加えていくことになるであろう。縦断的データの分析法としては，従来のモデルでは測定機会の順序の情報がとりいれられていなかった。この点で，Guttmanのsimplexモデルとの結合も今後の努力目標となりうると考えられる。

後者については，本紀要に執筆したような一種のまとめを必要とした。今後，幾つかの〝技術的〟問題の解明に努めたい。

ところで，昨年も少し記したが，最近流行の認知科学に私も関心をもちつつある。計算機科学と内観主義(?)

の奇妙な結合物のようなこの領域について疑問はもちつつも，極めて魅力的であることは否定できない。心理現象というものは，何らかのモデルを通じてしか認識できない，という前提に立つとき，従来の〝定量的〞モデルが極めて貧しいものであることは認めざるを得ないであろう。すると，認知科学の〝syntactic〞なモデルは，豊かな可能性をもつものに見えてくる。話は飛躍するようだが，質問紙法による調査等も認知科学のようなモデルを通じて全く異なった観点から見ることが可能になるのではないか，という気がしてくるのである。私自身は，いくらか距離をおきつつ，認知科学の今後をながめていきたいと考えている。

研究経過報告

池　田　博　和

1.）昨年度に文部省科学研究費の助成をうけた「名大式ロールシャッハ技法における〝思考—言語カテゴリーの再構成」に関する研究は，村上英治教授，土川隆史講師その他の共同研究者とともに着実にすすめられ，その中間報告は今年の東海心理学会第29回大会において，「名大式——，現時点における総括」と題して報告された。

2.）大橋正夫，久世敏雄両教授ほかの編集になる「入門心理学」（福村出版，1980）には，「パーソナリティの査定」の節を執筆させていただいた。

3.）教育学部のいわゆる「教育60年代研究」に関連しては，筆者のかねてからの懸案であったところの自閉症論を，「自然さの喪失——人間学的自閉症論からみた現代の教育観——」と題してまとめることができた（「教育60年代研究　第一巻　現代の児童観と教育」福村出版　近刊）。

4.）田畑 治助教授ほかの共同研究者との臨床青年心理研究会に関する成果は，本紀要に間宮正幸君他との共著により「臨床青年心理学研究（VI）——7年間にわたった登校拒否を克服した青年——」と題して報告された。同じ仲間によってすすめられてきた「登校拒否の家族研究」のまとめは，今年の紀要に間にあわすことができなかったが，今後もなおこの線に沿って一層の検討を重ねていきたいと考えている。

5.）昨年度は，10月に「心理臨床家の集い」が，また1月初旬には「全国学生相談研究会議」が当名古屋大学で開かれ，これら全国的規模の集まりをあいついでお世話することのお手伝いができたのは幸いであった。また，この7月下旬には，箱根でおこなわれた「学生相談関係教官エンカウンター・グループ」に参加でき，グループ経験を深めることができたのも貴重な体験となった。

研究状況報告

鹿　内　啓　子

1　帰属作用に関する研究

これまで帰属作用の個人差の問題に関心をもち，とくにself—esteemを取り上げて，それが帰属にどのような影響を及ぼすかを検討してきた。昨年は，self—esteemが他者の成功・失敗の帰属に対してどのように影響するかを検討したが，それらの研究結果を，現在まとめ終えた段階にある。

これらの研究を通して一応の知見は得られたが，より重要なのは，self—esteemの違いによって生じた，自己あるいは他者の達成結果に関する帰属の差異が，その後の行動にどのような影響を及ぼすのか，という問題である。近年，教育場面において，学業不振や無力感を帰属作用によって説明し，さらに治療しようとする研究の流れがある。そこで昨年度末に，大学生を被験者として，失敗についての帰属が達成行動への固執性とどのような関係をもつかに関する実験を行なった。しかしこの実験は残念ながらうまくいかず，現在適切な実験計画をたてるべく，検討中である。

2　対人関係の発達に関する研究

大橋正夫教授他7名からなる社会心理学研究会の共同研究として行なわれたものである。相互に未知の者によって構成された集団の中で，対人感情や対人認知がどのように変化・発達して，集団が構成化されていくのかを検討することを目的として，本学部附属中学校1年生の2学級を対象に，昨年度の1学期と2学期の長期にわたり，継続的に調査を実施した。

昨年度末から今年度にかけて，多量のデータの処理に手間取りながらも，基本的な問題についてある程度の分析を行なった。これについては，第44回日本心理学会大会で発表する予定である。

研究経過報告

二　宮　克　美

本教室の助手として着任して以来，既に半年の月日が流れた。しかし，この期間だけに限っての研究経過を報告することは難かしいので，今回は現在までの研究経過を簡単に報告することにする。

1. 個人研究について

児童の道徳的判断の発達について研究を進めてきているが，その成果はこれまでに次の2つの論文にまとめた。

「児童の道徳的判断における意図の認知とモデリングの効果について」　教育心理学研究　第27巻　1—10　1979年3月

「児童の道徳的判断に関する一研究：Gutkinの4段階説の実験的検討」　教育心理学研究　第28巻　18—27　1980年3月

現在，Gutkinの提起した4段階の者の特質を明らかにするとともに，道徳的判断の発達に関連する諸要因の検討を目ざしているが，この点について既に次の論文をまとめた。

「児童の道徳的判断に及ぼす意図と結果の情報提示順序の効果」(教育心理学研究第29巻に掲載予定)

これに続くものとして，現在,「児童の道徳的判断に関する一研究：自己の行為の判断と他者の行為の判断との比較」をまとめている。また，8月に日本心理学会第44回大会で「児童の道徳的判断に関する一研究：道徳的判断の一指標としての反応潜時の検討」を，10月に日本教育心理学会第22回総会で「児童の道徳的判断に関する一研究：「嘘」についての道徳的判断の発達」を発表した。

今後の研究課題として，「過失」「嘘」に続いて「盗み」を主題とする例話におけるGutkinの4段階の検討を考えている。また，道徳的判断の発達とprosocial behaviorとの関連もできれば検討したいと考えている。

2. 共同研究について

青年期の社会的態度の発達と変容の過程を検討するため，数年前から久世敏雄教授の指導のもとに縦断的調査研究に参加してきた。その研究成果は，これまで本紀要に逐時報告されてきたが，今回も「中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究(Ⅱ)」としてまとめられている。現在，資料収集もほぼ終結し，総括的な検討を残す段階に入ってきている。

その他，名古屋大学教養部八重島建二教授の指導のもとで，椙山女学園大学の大野木裕明ならびに本学大学院生小田侯朗とともに，Yando et al.(1978)の提起した模倣における2要因理論を検討した。その結果は，8月の日本心理学会第44回大会で,「児童の遊びとモデルの示範：Yandoらの2要因理論の一検討」と題して発表した。これは，なるべく早い機会に論文としてまとめる予定である。

名古屋大学教育学部臨床心理相談室昭和54年度活動報告

Ⅰ. 昭和54年度の新規受理件数

昨年度の新規受付ケースは計70例であり，その年齢ならびに件数は，表1に示すとおりである。年齢面では，就学前のものが，約54%をしめるのに対し，中学生以上は約23%であり，青年期以降のケースに比して，幼児・児童が多いのは，前年度までと同様の傾向にある。

このインテーク，70ケースという数字は，相談室開設以来，52年度の71ケースに次ぐものである。しかし，実をいえば，この数値の大半は，10月までのおおよそ上半期の間ですでに到達され，この時点で部屋とスタッフともに当相談室のキャパシティを越えてしまったために，それ以降，新規受付はやむなく，原則として中止，新年度にまで延期されたのである。ただし，プレイルームや並行治療を要しない青年期以降のケースや特別な事情のあるものは別とされたので，11月以降にも若干数は受付けられている。上記の数値は，このような事情の結果によるものであり，54年度の相談申込みが急激に増加したことは確かである。

その理由のひとつとしては，当相談室に関連した記事がいくつかの新聞にあいついで載せられたことにもあるが，ともかく，このように「(外に向けての)地域サービス」の面での要請が充実してくることは，同時に他方の「(内に向けての)教育・訓練，さらには研究」の側面を充実させることへの刺激ともなるものであり，われわれとしては，社会的責任の重さとともに「やりがい」を感